



ペンデル干渉による単結晶評価

北口雅暁、伊藤茂康、中路雅也、広田克也、清水裕彦
名古屋大学 理学研究科

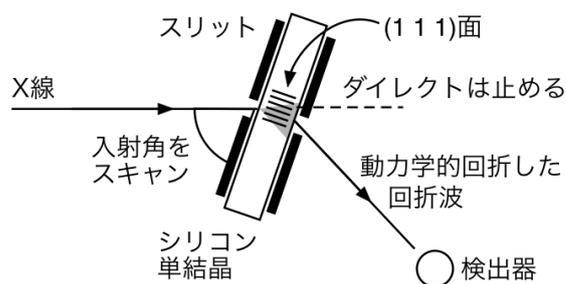
キーワード：中性子電気双極子能率、素粒子標準模型を超える物理、動力的回折、ペンデル干渉

1. 背景と研究目的

宇宙誕生の際、物質・反物質が同量生成されたにもかかわらず、現在の宇宙は物質優勢である。これを説明するのが「CP 対称性の破れ」であるが、素粒子標準模型が持つ破れの大きさは観測事実を記述するには小さすぎる。これは未知の大きな CP 対称性の破れの存在を示唆しており、現在素粒子物理学の最大の課題の一つである。中性子の永久電気双極子能率は、CP 対称性の破れと対応した「時間反転対称性の破れ」の探索の良いプローブである。中性子波動が結晶内部の電場によって受ける影響を高精度で測定することで、中性子電気双極子能率を探索することができる。単結晶内部での中性子波動の伝播は動力的回折理論に基づいており、その理解が必須である。本実験では、単結晶による動力的回折を観測するための測定手法の確立を目指す。単結晶の動力的回折特有の現象としてペンデル干渉を測定する。ペンデル干渉は結晶の対称性に起因する干渉縞で、X 線を用いても現れる。中性子線を用いた実験の基礎として、X 線によるペンデル干渉の測定を行う。

2. 実験内容

50mm×40mm×2mm 厚のシリコン単結晶の前後に幅がそれぞれ $10\mu\text{m}$ と $20\mu\text{m}$ のスリットを設置し、モノクロメータを取り外して得られる白色 X 線を、所定の角度で入射する。結晶面 (111) でブラッグ反射するエネルギーの X 線のみが動力的回折の結果下流スリットを通過する。結晶を自動ステージで回転させ、入射角と使用波長を変更しながら透過強度をスキャンする。回転角に応じて検出強度が振動するペンデル干渉縞を観測する。



3. 結果および考察

(111)面による回折自体は観測できたが、高エネルギーX線のスリット透過成分などバックグラウンドが大きく、ペンデル干渉による強度変化を観測することは出来なかった。これを踏まえて、測定セットアップを検討することになる。

後日、得られた知見を元に測定セットアップを最適化し、中性子ビームを用いた実験を行い、動力的回折の帰結としてのペンデル干渉を明瞭に測定することに成功した。現在論文を準備中である。

4. 参考文献

1. A.D. Sakharov, *Pisma Zh. Eksp. Teor. Fiz.* 5, 32-35 (1967).
2. J.M.Pendlebury, et al., *Phys. Rev. D*92 (2015) 092003.
3. V V Fedrov, et al., *Phys. Lett. B* 694(2010).
4. C. G. Shull, *Phys. Rev. Lett.* 21, 1585 (1968).